夢国新語

其三

ル7
3100
4

早稲田大學
圖書館
寄托者 吹田文庫
寄托書第 二四
號 3
第 4 號
第 冊

ル名2
2855
巻5-4
ル7
3100
4

萬國新話卷之三

亜細亞海嶌之部

東都　森嶋中良　編輯

大正十年九月廿日寄贈
内田泰子氏

○凡哇紀傳

凡哇國の都を「パデイヤタラン」とふ。國王一日筵席を設して。大に雜劇戯なさしむ。こゝに殿の外小一人の童子盤桓り。忽管弦の音伏史て。喜場より面を一変せるこゝ。守門ゐ去らくの中伏つゝバ守門の長叱して曰彼處

汝めき少年者の注屋に不ようあるべと。眼にて
走り去て睨みしぐるる。彼童子ことごとくせで微哂
ていとゆう。汝等いうやうに汝ゆるとる。我蹤越て
波而よ到るべしと。傾て殿の門へ入ると。元来
此童子の父ハ鍛工の長にて。此度小居合せる
が。此様子見るより。走り寄て引留め或ハ叱り
或ハ宥めて留めんとすれども。つくる丈へで振
放して殿門小跑入り。彼雞劇の場へ行んとも
しがれども不案内のゆゑ誤て道に
違へ。後宮の方へ行て。堂上の一室の

器を倒す。名状ハしがたし。此制度つ名記
此室にて國中の重器みして。国王のかハ
みぐりよ敬ぶ。我ゆさざる物なり。志昭
我此童子と齊志く堂上よ昇る。打節
傍りよ人なりれバ。思ひの仕ぶで既再し
ける。時ニ國王ハ雞劇を見て大よ樂我極る
不。たちまち彼樂室の方我出て大よ驚き
何者ぞ我室我捕ハ悠よ敬ぶやとて。急小人
をたちハ去て是我捕へ去む。官人等うけたり
後堂よ礼入。我猶よ彼童我捕ハんとて。童子ハ

騒うぞ。力ゑ振て皮人ゑ拒りれぐ大勢の皮人ゑ云甲斐もなく追立られ。後ゑ入て逃散らう。國王ゑの強ゑ入るゑ。何れも頭面手足ゑ重傷を帯さるハ。玉王ゑ召ハ宮中の長官ゑ問て曰。彼童ハ何者の者ゑ。かゝる勇猛の働ゑ為ゑと。「マントーリ」長官の名謹んで。彼ハ銀工長の子ゑ。と答ける。國王庶王ゑ命ぜて般工長ゑ召出し。其由ゑ尋ゑ。彼小皮者ハ微臣ゑ子「左レグワナラ」と申ゑ。国王曰我

ゑ子ゑ細ゑれバ。汝速ゑ彼小童ゑ連来べしとゑ。ゑれバ。般工長ゑ。こゝて御前ゑ立。即時ゑ「ワナラ」と召連来る。「ワナラ」ゑ。ゑる色ゑ。国王の御前ゑ。ゑつくと居り出。恐れ気ゑ。ゑく元ゑ居ゑ。その時國王問ていゑく。彼ハ実ゑ汝ゑ子ゑ。や。般工長答ていゑく。実ゑ臣ゑ子ゑて侍ゑゑり。國王又曰。ゑれゑ。汝いゑぐ妻ゑ娶ゑゑ。近ごろ一人の妾ゑ召抱へゑ。ゑれども。其日数猶僅ゑゑ。終ゑゑ斯ゑ男子

有て。志うもかゝる振舞に成ぬるこそ心得ぬ
とあり。ければ。鍛工長叩頭して宮中
けるハ。誠彼小女者ハ。新族の子孫養取て。
臣ゝ子とせし。仕ふなりと。國王曰。志うゝバ
汝ゝ子。かゝのめく長大ましてもも陳
勇ゝ。今日より我宮中ゝ召て召仕ふ
べしとて。やがて「ワナヒ」を堂上ゝ召て召
れける。鍛工も内ゝハ憂を抱いつゝも。外
ハ歓喜の色ゝ見ゆ。恩を感して退
出て。此段所縁あるべし前編を見よ

王ハ近侍する者僅に一二月。甚ハ近隣
の國に合戦ありけるが。やがて此所哇國とも
襲ひ来りけれバ。国王「ワナヒ」を軍持し
て。戦場ハ向ハしむ。「ワナヒ」戦ハバ必ず勝。攻
れバ必拔て。敵兵ハ追拔ゝ。許多
の洲縣を攻取。数多の賊宝を分ち取て凱
陣ありければ。國王大ゝ悦ビ是より彼
を寵愛する者ゝ十陪せり。遂ゝ「ワナ
ヒ」ハ召て万人を統る長として。「パテ
イヤヤラン」都の名の内「パフセル」地名の北の側ゝ居

任せしむ。其権勢。此國の執政「アリヤバヒヤク」人名あるものとなりけり。此「アリヤバヒヤク」なる者ハ。瓜哇国の諸臣多き中なれども。取りわけ貴重せらるる子細ハ。元来國王の子なれども。廣王の列なれども。今群臣の長として。執政第一の人なりしゆゑ。「バヒヤク」久しく封ぜられて都を遠ざかりしが。國中の政令をとりて。或日國王の御前ゆ出。願くハ國中の般王をことごとく我宅ゆ呼集ち。一ツの軍器を製せんと欲すと

請ふ。父の國王許容ありしかバ。「バヒヤク」ハ國中の鍛工を呼集め。軍器ハ多くず。して一の鉄室を造ること。もとも一日の内ゆ功を成ずんを要す。是何か小軍器をバ制せずして。此室ハ造るとなきバ。「バヒヤク」ハ。もとく不臣のこゝを懐き。父國王を弑して。おのれ「パテイヤマラン」の國王ゝと欲せらるきざしあり。故ゆ機密の謀を設けてこの室を営むなり。ゝ昨日ハ歴々。おのゝゝ外人の浅ゆんずる所ゆ。一日の中

ゐハ成就せしるみぞ有ける。既ゐ其室成
けれバ。「ハンヤク」種々の珍宝を挑列し。林
帳枕机の類。金銀珠玉を以てかざりて。帰り来る。
その上名香数品を具して。一室ゐ薫じ
満たりけれバ。一たび此室ゐ入るものハ恰天堂
ゐ坐するごとくをぼえける。「ハンヤク」ゐ
従ふ。王ゐ我宅ゐ招待せんゐ
を請ふ。王即時ゐ駕を促して。彼宅ゐ至
きバ。「ハンヤク」携行の旨を告げ出迎ひたる宴
筵排て。山海の珍味を盡しけるみぞ。王を

そしめ陪従の諸臣。各歓笑を極る
時。國王偶屋上の新室を見て。「ハンヤク」ゐ問
て曰。彼室ハ何の故ゐ造りたるぞと。「ハンヤク」
答て曰。彼室ハ乞比丘の寢室ゐ造りたる而
て。暑き時彼室ゐ入バ乞比丘を気絶せし。冷
ものハ乞暖ゐ。暖るものハ乞飢ゐ。飢
るものハ乞飽と。王駭ていく。之所の如き奇
奇なり。我暫く入て試んとて。即彼室ゐ
入るれバ。「ハンヤク」計らずゐ成を大ゐ怒び。
手早ゐ彼室の戸を閉ぢ。鉄室の四面ゐ薪

を積重ねしやうなるものにて。一回は火炎をうれ
ハ。修羅煙天に聳えて燃上る。陰従の諸臣共ハ
驚といへども。悪く「バンヤク」が猛威に怒る故。
進み行く火中へ跳入り。王に救ふ人の一人も
なかりける。良あつて國王燔肉のめくるを焼
死しなる様に引出さる。「バンヤク」妻を励ま
していつて曰。凡人なる者。いさらの債と
いへども。借りたるものハ必ず返さるといふ事
なし。我幼き時父國王の乃ち「カラハング」
河の名
の乃中へ投入られしなり。此事前編に出たり
詳命

今その債我償ふとて逐に其屍を。「カラ
ハング」に投入れむ。陰従の臣下おそれ中に。「ヨン
ガンダガ」といふる者。此席に恐び出。大子「スースト
ルーグ」の宮に来り。大に號泣して事の扶を
乞。太子大に驚嘆し。たちどころに宮中の
外の兵士を徴集して「バンヤク」が宅へ馳向ふに。
こゝに國中の者ども悪く「バンヤク」が威を畏れ
き従ひ来れり。太子の兵卒戰ふ毎に敗北。
四五日ろ程の戦ひに。近臣のこゝを討死し。
太子一人となりぬ。今ハこゝを孤立ふく

所より東方より道をこれ。仏法のくもり、一人千磨百経を凌ぎて。やうやく「カリグンテイング」といふ縣よりこゝへ逃げ出りり。爰より一人の老婆あり。名は「ニヤイランダカリグンテイング」といふ。素これ國王の妾にして。太子「スースートルーグ」は産まる後人より嫁し。此所より住居をかせり。太子先此老婆が家より移れり。此後の事は未だ。怪復讐のるは曷るのこと。肝膽をこゝに碎きり。扨も「アリヤバレヤク」は父國王に就して後「パテイヤヽラニ」より居住し

て自ら此哇國王と称するよ。人敢て反く者なし。此はきるふ今は「ゆ」なれ。太子「スースートルーグ」を偶宿せしめ。あるひは扶助を以て扶助し。合力をなすものあるハ。罪を加へべしとて。太子を探し求むる事甚厳密なり。「ニヤイランダカリグンテイング」或日用支あるて。「パテイヤヽラニ」の都より出しが。此制札を見て一驚に吃し。慌々忙々家より帰り。太子よりこの由を語り。且三人の兄弟「キヤイトウイラサリイ」「キヤイバアデル」「キヤイタムビ」

茅と高後して。左子は逃れ去ぬんとするを
留るあど。「スースールーピ」人々よ向ひて曰。今我
たとひ鉄骨銅皮ありとも。一掬の人丈は
「アリヤバヒヤク」が大軍か敵せんとすおのひもう
ど。彩は避て他邦よ走き。昨の至るを待べ
しとて。即時よ山地を去んとせ。四人の者
頻よ別は惜みて。皆く左子は棄るよ忍
ひど。彼是百人ばかりの人を従へて左子ふ
附添ひ。何度は尚去るもおく。そそそ
うこそく落行る。かくて数日は歴行よ幸

らして「クームバンジ」と云る山の麓よ着ぬ。
人々此山よ登んとするよ。路くるくる嶮岨
なれば。木の根よ攀附。岩頂よ縋て漸よ
攀躋する所よ。たちまち一陣の大風起り雨
八盆は覆るがごとく。木を拔石は飛して。電
光霹靂おびゝ赤く。山嶽も碎飛。天も破
るゝばかり。是何の故なれば此山上よ一
人の妖婦あり。名を「ニヤイテヤシマラトウンガ」と
云。天下の妖怪悪鬼の類を統従て。此山中よ
住て年久し。今此風雨雷電は衆の

妖怪篇。「スースールージ」以下の人々。此山に入る時。彼妖婦に告知らんとて。咄嗚呼る事なり。人々肝潰魂飛て。忙然として其打ち。何処とも知らず一聲の振鈴の響くと共に。忽雷鳴快晴せり。丈夫人々驚き励まし。山の頂に到りて見れば「テヤンマラ」の大木。（木名形状未詳）森々として生繁り。不思議や其樹の幾抱の。愛陰の多を発を。一行の人々大に驚き怪みけり。老子曰くらく平弱てよく此山中に「三ヤイテヤンマラトウンガル」と

いふ仙女ありて我が妻子の頃。此木に居て自言自語る所に。思ひもよらぬ彼木に大光明放て。銀の釣線を垂し。垂るや時。白髪の僊女現れ出て。老子に問へども地上に暁て曰。大仙我「スースールージ」。道士の為に困苦して此所に来れり。彼りくハ教ず無に出し。仙女曰。苦哉汝が来る。「アリヤバンヤ」。一叶の勢に乗して威権甚猛なり。更に汝に為べき術なし。我も亦汝を救ふ事を

得ざ。結ぶとも後来の苦餘れ示すべし。前み集れ詳よ是れ汝ん。汝今此山れ去り。牧も路を東よ面りて旅行せよ。行の数日あり。て一株の「ポーンマテイヤ」と名行る木れ見るあり。木の名形状未詳甚実れ食味ひ忘苦かるべし。甚樹ある不よ都を建べし。百神擁護の地るれ。父國王の讐れ敢ぎるのこたるべ。子々孫々よ至るを永久よ瓜哇國の王位れ保つべし。牧且るみ来れれ前過のれ汝ん。れ元来汝ら

大叔母あり。て。汝ら弟祖父「ムーデインゲサリ」の女あり。れ為れ妻瓜哇國中の諸侯容貌の美麗なれ。各おのれ娶んと欲し。妻問るるれ者きるれば。密よ一千人の女子と相約るれ者依りて。敢て衆人の妻問れ行ひ。元るを於て衆諸侯怒れ動し。遂よ干戈に及び。合戦利あらず。て。雙親難を逃た食へ。れ。我ハ其時より此山ふ行れ住し。辛を積月を思て。こ山る世の者とれ

ひと。涙ながらに。さまざまに。こちまち交離しる
老女の形に変じて。婦約する美婦人となる
きう。其容貌実に絶代無双にして。嬌氣
人を迫きう。左子甚だ精神恍惚として正
気なく。都て前後の弁ぜず。一意に甚
美貌に対ふて抱擁し。手を交て
戯れまく。忽然として又こゝの形となれ
ば。左子心始めて省悟し。大に愧恥地に
伏して罪を謝す。仙女曰。あえて怒るなかれ
吾。もとより此身分に反りる道ふ棲人なれば或ハ

老ける姿を現じ。または稚き者とも変じ男
となり女となるなり。我ハ[illegible]して長ふ
死なるなり。変化不測の術を行ふ。我
ハ是より南海「ブランデビ」つる山の南「マウ
タビ」ふ都に築き。万國世界ふ為ん所の
妖怪悪鬼の首領となり。大事を決し
大軍を出さん時。汝必ず我名を呼べ。時ふ
ありて守護ふまべし。こゝ此地を発足
せんと。未だ教諭なるの掌を指ざし
「スースールーグ」をこゝやとして一行の衆人

こゝ〳〵く拜伏し、即仙女の命ふまさぐひ。東の方より路紙りしあり。仙女の教紙ふひ彩み。是教紙ふぞ行行よ。「スースルーゞ」疲難を て。一株の木下より憩息ふりゞ。地上より二三箇の菓実あり。是紙ふるふ色熟し。う採て食へバ。甚味ひ至て苦し。此より於て彼仙女の言紙ふひ合せ。叔父「ウイラサリイ」より問けるバ。是ハ何の菓あて。此地ハ汝が領地ぞやと「ウイラサリイ」答て曰。此菓ハ「マデイヤ」とふいふく。まゝ此地ハ「アステイイ」とて。則「パデイヤヤラ」の屬縣あて。汝が領ふべき所ふれども。「アリヤバヤ〳〵」「パデイヤヤラ」紙押紙走てより。けゝも彼賊臣の領ふるまとと「スースルーゞ」此言紙聞より。天より歡び地より喜びていく。幸なるか。是ふから大叔母の教ふ不ふして。紙王業紙奥ふべき地なり。速ふ都紙建べしとて。やゞて地名紙「マデイヤパイ」と設ち。遂より此不より都城を築き。近遠の人民を募集ふるより。前國王の旧恩紙荷ふる者ハ。紙もくと

馳集る程なく。義ぐんもたくさんして数千の軍兵引わかれ。いづれも此砦を乗取て。逆臣ゴルバン一統は本城に立籠り。父國王の妃を殺さんとせしが。合戦の評儀まちまちなり。去程に「エングワナ」は「アリヤバン」ヤ「ビ」國王を誅し「ラ」新帝「パ」の内「パツセ」の地に在て。道路くるくる隔てけるが。此大変に驚き怒りしが。其後追々「アリヤバンヤク」が逆意の事。去子も伝聞ありしが。其怒り骨髄に徹て。

今は「ワナ」が頼むべき君も去子もまし。此上は「パデイヤ」の都へ攻入。逆臣「バンヤク」を討亡ぼし。忽に曠野となして。今の怨念を散ずべしとて。たゞちに下の軍兵引卒し。不日に都へ攻上り。疲食を忘れ息休も絶て。日々夜々に血戦して。屢勝利をなすといへども。寡は衆に敵しがたく。大國の軍兵なれば。切ても突ても尽ることなく。中々一時に取挫きがたく。

肺肝を摧きしぐ。此頃太子「スースール
ービ」「マデイヤパイト」より都を建。四方の
士民招くと雖も。取扱もこれあるべ。
昌明は馳参じ。「スースールービ」より謁見
しられば。太子一度は怒み。一度は喜び。
まるから「ワナラ」より三千の兵を揚げて
「バデイヤヤラ」より進発せしむ。「バンヤビ」
此中に出よ。も。逆兵をもぐつて逆
戦ふ。合戦数廻して義兵遂に徳
利を得。敵兵に麗み。大将「バンヤビ」

を擒とし。一刀の下に命を切る。此に於
て。「スースールービ」他日の鬱懐一時に啓け。父
國王の神霊に慰さるる。得たり。
して後。其弟は「マデイヤパイト」より都城
を奪て。瓜哇國王と称せられ。「バデイヤヤラ
ビ」は。其子「バンヤビ」
て是を治めしむ。三人の叔父に執政と
「ワナラ」より大夫を以て其弟の
官職盡く備りて。瓜哇國全く平均。
新國王の徳化より麗き迄ひける。其後年

を歴て。「スースールーグ」病よ係りて神去りれバ。其子「パラプーアノムロワリングパスサル」是よ嗣で瓜哇國王と称せられけるとぞ。

此一條ハ「バターヒヤス文ノードシカップ」と云る書中（瓜哇要録と云義なり）「イヤワーンセヒストリ」と云へる條に。予が友良庵前野達が譯しる。「イヤワーンセヒストリ」ハ瓜哇紀傳なり。其總目に見ゆる。第三條と有て。其一二の條に脱せり。故よ起牛の来歴に詳よせもれを后に補ふ。

○竹鎗會（瓜哇）

方輿勝覽。おもひ外國竹枝詞の注よ云。毎國十月を春首とす。竹鎗の會といふ有り。夫婦塔車よ乗て會所よ至り。夫ハ偶を立て各竹鎗に執。妻ハ各三人づゝ其の末棍を執て其中よ立。敵を防ぎ號とし。鋒に支ふ。時に二人の妻。彼末棍をもつて突を防て。那

剌那剌といふ。即ちのすゝめて退散させ。若突殺さるゝ者あれバ。國王より殺せる者に命じて。金銭一箇を死者の家にあたへしむ。死しける者の妻ハ殺せる者に随て去ともあり。国王も妃とゝもに。車に乗て會所に出るとぞ。

○聖水　同上

此國の海灘に小き池有り。聖水と名づく。元の将高興。史弼。此國を征せる時。水に乏しく。しきりに天に祷祝し。鎗を

地上に突立ければ。泉随て涌出せしとぞ。我朝壺井の清水も同日の談なり。

○巴旦人日本へ漂着の始末

巴旦ハ大寃の南に当りて。天竺に近き嶋なり。延宝八年五月十七日の夜日向の國へ十八人ばかりの異國船漂ひ着ける。夫より翌月十八日。領主伊東出雲守殿より長崎へ送らる。則鎮臺牛込忠左衛門殿のはからひにて十善寺御薬園の門。唐造の船具は入置れ。弐間梁に六尺計小家のうちへ

波漂客紙を重ね。扨鹿紅毛の次女を
こじ免。あく〳〵事を古人よ命ぜられて。回
せらるれど。些も云語通ぜざるゆえ。行ひの
人とも知ぐりしら所茶筅苗手入汲水野
小たゆつかるゝ。女子見あり男みて。手ゆ
盥小ゆ紙港へ小石を沈て嶋紙を赤し。笹の
葉の舟よ土偶人紙を乗せ。水よ浮べこせられ
ど。漂客ども合点して。扨て嶋紙を作り諸
けるゆ。まこと〳〵方位を正し。日月星辰の
形紙作りて晝夜紙分ち。野も船路を行

りけど。異國人つぐさふ仕方かしりり紙。
一地圖小燭し見て。巴旦人なゝを発
し。結量へ訪と告しりれば。牛迎氏大ふ
感公あり。小たゆつを巴旦人姓名尤のあり。
生たり。漂流の巴旦人。姓名尤のあり。

ヌマチイ　二十五六歳程
スイモンクイナムアウク　三十一二歳程 病死
スイモンマツトバク　三十四五歳程 同
シタヨムナツク　二十歳程
マトツポ　五十七八歳程 病死

スイモレカラム　二十二三歳程　病死
スイホウ　五十七八歳程　同じく
シヤウロタツコ　十五六歳程　同じく
子ヤス　二十四五歳程　同じく
スイモレトツク　三十二三歳程
ケムライナツク　三十二三歳程　病死
ラツタウ　四十四五歳程　同じく
スイモレカツカウ　三十七八歳程
ヒハクランナツク　四十四五歳程　病死
スイモレアツ　三十一二歳程　同じく

セイダイアツク　二十二三歳程
スイモレムスリ　二十二三歳程
スイモレカラムナツク　三十二三歳程　病死

右十八人の肉色黄白なる有。黑きあり。既に死なれども。剃髮せざるもの。剃せられたるもの。背の高さ五尺五六寸。衣服は日本の風呂敷の如し（中良案ずるに是は天竺にて云ふる所の腰巻と云ふべし）後ろ冷気の物よりあり。木綿布子にあらざれども。殊に拔き出。袖無の襯衣（うらぎ）を制して居せり。褌（ふんどし）八幅七寸斗の

巴旦人之圖

耳よりなれハ立山の廳へ
とゞめて呼出されるゝ外
切戸口より
入時一度
十八まての数字ハ
書るゝを耳寄へ有
さを行者の巴旦人
と呼て支を矢ぜ
られしゝん行

耳珠ハ環状
ゝ完ゝ

木綿にて。織器よまぐひ糸にて織しの掛紙
あり。唐山製の刀紙佩。煙草煙管八日幸語
と同し。文字有。横小書也。中良堂ヲ天竺ニテ用ヒタリコレイ区文字なるべし
持渡りたる蜀黍の移紙六月為。九月より至
きびこにて喰ふ。阪地焚法日本と如何
なし。但し土鍋にて炊なり。結蕎の命
ありて。死しなる太をあるべきれば。
焼めして小刀にて切り。水煮めして食ひ
なり。菓子などあるもきびこ。人数より切り配
て食ふ。或時ハ大木の枝へ。細縄にて吳紙也。

紙にて元を引。ふ。煮めして食ふ。
に登りてハ樹のもく海へ入てハ移のやし。
殺ハ結ハ。長サ二尺五六寸。横を天ぐりなる
刻物の箱を壁より立を。ハ紙にて塗て
毎朝ハ紙浴。九月の比ハ小てハ立湯
紙用ざりしと也。巴旦人ども遠き病死
。行きも崇福寺へ残る六人ハ葬り
墨紅毛人を石出し。此者ハ本國へ送て
をつかべし。迎ハ後さる。墨人畏りしるも
ありて。同年九月出船の節同船して出帆

志けるが。巴旦人も本國へハ帰らずして。咬嚙吧（カヲパ）に住ハ妻（ツマ）に具し一人ハ泥水匠（ドロミヅタクミ）（爪哇の都なり）となり。陸地ハ治者の加工となりて居る。年の加比丹言上せしとぞ。巴旦人の常ふる所ハ代銀百目ありて拂ふなり。長サ六間横ハ丈五寸。後ハ丈ハ三寸余あり。小舟なり。牆長サ丈ハ三寸余あり。

○此事西川氏の長崎夜話。及び華夷通商考に見ゆ。

○此大槻玄澤子より右の回紀に記せる

故いまだ其漏るを説。詳説ハ予が手輯萬國所の。海外異聞中に收めり。

○老者を殺す　巴旦

旦ハ年老ハ生産の働悪しく役に立ざるとして。親ハ子に殺して仕ふなり。家道儀陸芋料を多く貯へ家ハ富情なれども。老者ハ年老ふるも有とぞ。此國五穀ハ絶なく。芋を以て糧とす。素より仏神を信ぜず。故に夷ハ冠婚葬祭の礼もなく。人死

それハ畑のかゝゝ埋免。其孫を踏平し
畝となん。

右の話ハ。寛文八年尾州智多郡大野
村なり。孫右衛門といふ者の所。巳且ふ
漂着し。移くの報難よ逃るが。幸
らして彼嶌を逃出。南蛮人よ
扶助せられて。日本へ帰りて水三
どもの況るなり。其記録ハ海外異聞
中小栽なり。

○甲冑　同上

彼水主ども巴丹より薄波の号。彼國中「マナニ
ヨイ」といふ所と「ウサ」といふ所と仇を結び
て軍を起しける。鎧ハ牛皮あて作る。冑ハ木
を刳て鉢子はめ。わく製しなるこの様なり
しとぞ。

○家作　同上

家ハ大抵九尺塗よ二間なり。形のごとハ
三尺ばかり。四隅ハ高くして出へ是海
風防ぎのごとくなり。客来ハ内

へハ入ぞ。各門口ハ居石あり。其石へ獨鈷を
さし。扨さるくハ数待ともん。恵て家化
に釘を用ゐぞ。樹の皮ふき拵て立屋上ハ
何迄も茅葺なり。根太ハ木紙なりしぐるる
ばかく変物もなし。金神地玉のうれ。
極月中も。日本の三月比の気候と同じ。
さるふまりて。國人まるくハ裸なりとぞ。

萬國新話巻之三